

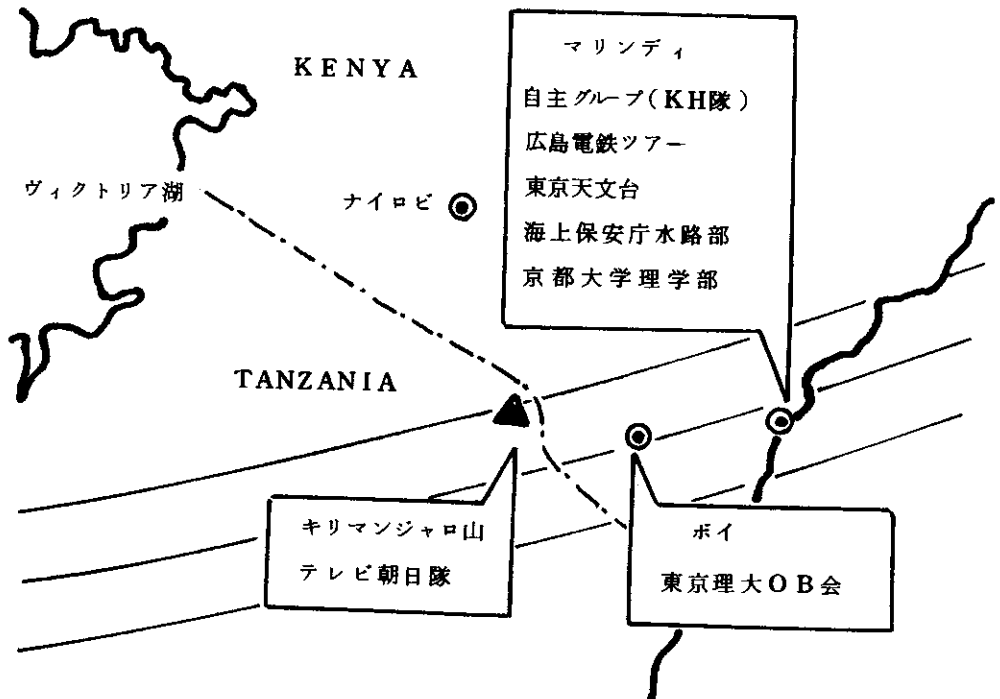
# 日食観測隊の概況について

山口正博

今日の日食はアフリカ大陸およびインドと2つの陸地を通過し、アフリカの東岸とインドは晴天率も良好な過去の記録があります。さらに昨年1979年2月26日のカナダの日食では-15℃という寒さに耐える必要があったのに対し、今回は、アフリカ、インド共に温暖な地方を通過したために、日食観測に参加した人数も、アフリカとインドを合計して、約220名ぐらいの人数となりました。

## ① アフリカ方面

前記のように今回の皆既日食はアフリカとインドの2つの陸地を通過し、特にアフリカ東部は皆既帯の中心部に近く、晴天率も良いために、ケニアのボイとマリンディの付近が世界各国からの観測隊の目標になりました。日本からはボイに東京理科大学天文部OB隊が28名、マリンディには京都大学理学部、東京天文台、海上保安庁水路部のプロの観測隊をはじめ、一般市民としては筆者が参加した広電観光株式会社が後援したアフリカ日食観測隊が21名、木村精二氏がお世話した観測隊が19名、このほか広電の南アフリカ観光の後日食を見た人が17名ほどいたようです。したがってアフリカ方面はケニアを中心に、85名ほどの日本人が日食の観測に参加しました。



## ② インド方面

今回の日食はインドでは皆既食が地方時の $15^{\text{h}}30^{\text{m}} \sim 16^{\text{h}}00^{\text{m}}$ ころになり、継続時間もアフリカの $4^{\text{m}}$ に比べて $2^{\text{m}}40^{\text{s}}$ ほどに短くなりました。しかしインドの2月は晴天率が100%に近く、しかも日本からはアフリカよりも近いので経費も安くて済むため、学生や一般の人々が多数参加しました。インドはアフリカとは逆に西側ほど天文学的条件は良いのですが、西岸のカールワールに比べて内陸部の方が交通が便利であるため、主としてヤーラプール、プブリおよびライチュールに観測隊が集まりました。まず東京理科大学天文部OB隊が18名、広電観光株式会社が後援したインド日食観測隊が22名、東京JTB日食隊が23名、この3つの隊はライチュールに行きました。またインドが専門の旅行社アショカツァーズでは、木辺成磨氏を団長に仏教の行事に参加し、その後プブリで日食を見た人が約40名ぐらいいたようです。さらに、宮本正太郎先生を団長にして京都JTB隊21名がアンコーラに行かれました。このほか阪急交通社の後援した観測隊や、自主グループとして2~3名で行かれた人もアフリカ、インドともにいるようです。ゆえにインド方面は西岸から中央部の各地に130~140名の日本人が日食観測に参加したものと推定されます。

